

平成三十年六月十日発行
皇學館論叢第五十一卷第三号 抜刷

研究ノート

菅島の戦争遺跡

扇
野
耕
多

菅島の戦争遺跡

扇野耕多

□ 要 旨

戦争遺跡とは、近代以降の国内外の戦争とその遂行過程で形成された遺跡の事をいう。三重県には数多くの戦争遺跡が残っている。しかし未だ十分に調査されていない所も多い。今回、鳥羽市の伊勢湾口に位置する菅島で調査を行ったところ多くの新たな戦争遺跡を確認することができた。坑道式掩体や棲息壕、掩体、交通壕等の様々な遺構の発見により菅島における陣地の構成が明確となった。それゆえ、本稿では菅島で新たに明らかになった戦争遺跡について報告をする。

□ キーワード

戦争遺跡 菅島 鳥羽市 本土決戦 太平洋戦争

はじめに

戦争遺跡とは、近代以降の国内外の戦争とその遂行過程で形成された遺跡の事をいう¹⁾。全国各地で多くの戦争遺跡が確認されており、三重県下でも同様に数多く現存している。三重県の戦争遺跡は平成十八年に三重県歴史教育者協議会が刊行した『三重の戦争遺跡 増補改訂版』や全日本軍装研究会の会報『軍装操典』²⁾にも詳しく述べられている。『三重の戦争遺跡 増補改訂版』によると三重県鳥羽市の伊勢湾口に位置する菅島には、観測所とその周辺の本土決戦用陣地等の戦争遺跡があると報告されている³⁾。観測所は、火砲の試験場である陸軍伊良湖試験場より発射された砲弾の弾着を観測する施設で、菅島の他に

も同じ伊勢湾口に位置する神島と鳥羽市に所在する石鏡にも同様の観測所が存在していた。菅島の観測所は昭和十(一九三五)年頃に建設され、現在でも鉄筋コンクリートの観測所施設と陸軍用地標柱を見ることが出来る。また、その周辺には本土決戦用の掩体も二基確認されている。しかしながら、それらの調査は十分とは言えず、著者の更なる調査によって同書に報告されていない戦争遺跡を確認することができた。本稿では菅島で新たに明らかとなった戦争遺跡についての報告をする。

(一) 太平洋戦争末期の菅島周辺の陸軍部隊配置

日本は太平洋戦争での戦局悪化に伴い本土決戦が現実的となった。そのため全国各地で本土防衛の準備が進められた。東海地区の本土防衛準備を担っていたのは第一三方面軍であった。その隷下の百五十三師団(護京師団)は、昭和二十(一九四五)年四月八日に京都で編成され、伊勢湾に対する敵の侵入の阻止と伊勢神宮の防禦を任務とし、志摩半島から渥美半島の防衛を作戰地域とした。⁴⁾ また師団司令部を神宮皇學館大學に置いて、歩兵四四一連隊、歩兵四四二連隊、歩兵四四三連隊、歩兵四四四連隊の歩兵部隊が隷下として所属していた。中でも志摩半島北部に配備された歩兵四四三連隊は、同年の五月十日に久居で

編成された後に鳥羽市の常安寺に連隊本部を置いて、鳥羽から加茂、答志島、菅島、石鏡から千賀、青峰山、朝熊などで本土決戦の準備を行っていた。⁵⁾ 同連隊の第二大隊は答志島に大隊本部を置き、その内の一個中隊を菅島に抽出していたため、この部隊が菅島で陣地を構築していたと考えられる。また、そのことから菅島で陣地の構築が始まったのは少なくとも歩兵四四三連隊が編成された昭和二十(一九四五)年の五月十日以降であることがわかる。

(二) 各陣地の概要

調査によって明らかになった遺構には坑道式掩体や棲息壕、掩体、交通壕などがあることがわかった。⁷⁾ 坑道式掩体と棲息壕は洞窟状の地下壕で、前者は火器を据える部屋が存在しており、後者は兵隊の休息に使われるものである。掩体は火器を据える場所を掘り窪め人員や物資を掩護するもので、交通壕は人員、火器を敵から見えないように、また、攻撃から掩護して移動させるためのものである。⁸⁾ これらの遺構を報告していきたい。なお、陣地名は当時の呼称が不明であるため便宜上小字名を冠して命名した。

菅島の戦争遺跡（扇野）



図-1 菅島戦争遺跡分布図

- ①白浜陣地 ②アゴケ谷陣地 ③ボシ山陣地 ④長崎陣地



写真-1 白浜（しろんご浜）から見る白浜陣地

①白浜陣地（写真-1、図-2、図-3）

本陣地は、島の北東部にある白浜（しろんご浜）の西端から西に約三〇mに位置しており、坑道式掩体一基と不明遺構一基を確認することができた。坑道式掩体の規模は全長約一〇m、幅約一m五〇cmから一m六〇cm、高さ約二m一〇cmである。坑道式掩体は未完成のため銃室や銃眼と思われる箇所は確認できないが、白浜（しろんご浜）方向に掘削されていることから白浜に上陸した敵を西側から側射するように陣地を構築したことがわかる。さらに、坑道式掩体より南西に約二mの位置には、東西に二m五〇cm南北に三m五〇cmの四方の方形の掘り込みがある。先の坑道式掩体と関係があると思われるが詳細は不明である。

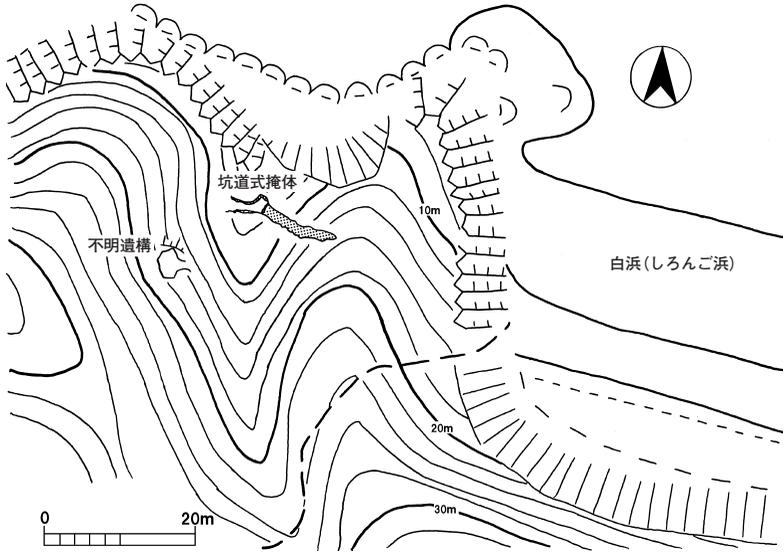


図-2 白浜陣地周辺遺構群（1：1000）

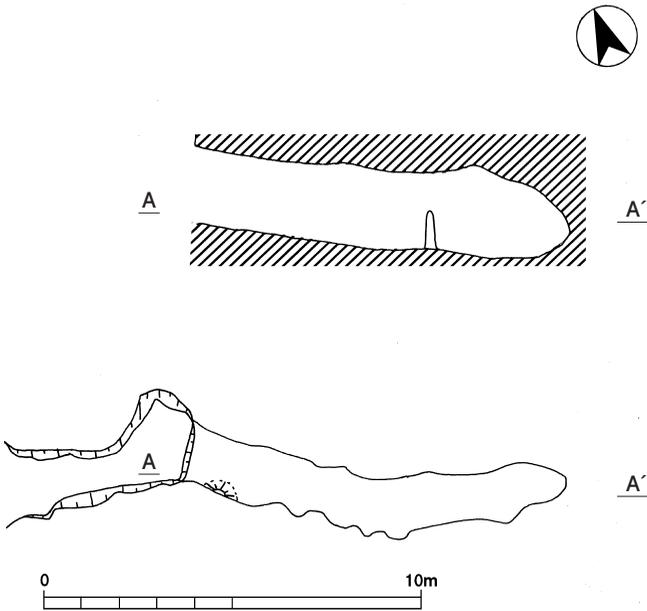


図-3 白浜陣地坑道式掩体実測図（1：200）



写真-2 アゴケ谷陣地坑道式掩蔽部の開口部

②アゴケ谷陣地（写真12、図14、図15）

本陣地は、観測所から南に約六〇m、標高約六九mの西側斜面に所在している。遺構は未完成の坑道式掩蔽部（地下壕）が一基あり、規模は全長七m一〇cm、幅約一m一〇cmから一m七〇cm、高さ約一m八〇cmから二m三〇cmである。壁面の両側には壕を強化するために用いられた坑木を設置するための掘り込みが見られる。この坑道式掩蔽部（地下壕）はどのような目的で構築されたかは不明である。また、観測所付近に構築された掩蔽体となにかしらの関係がある可能性が高い。

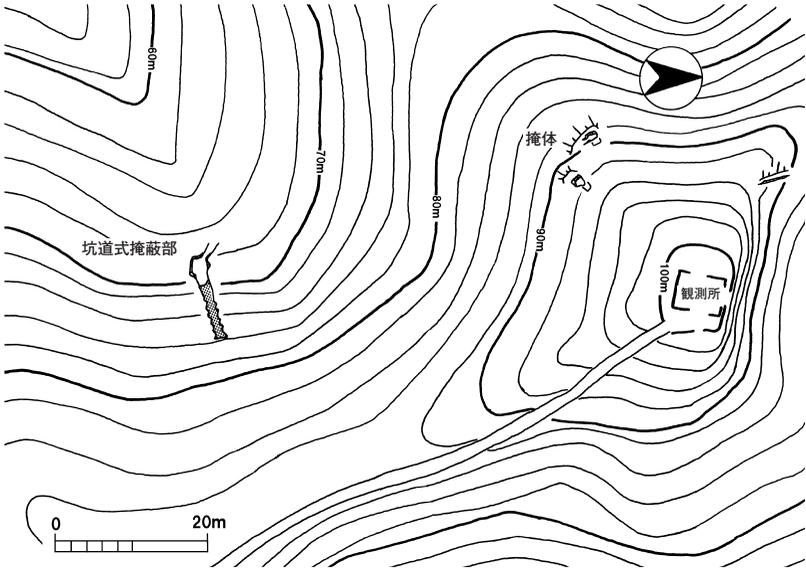


図-4 アゴケ谷陣地遺構（1：1000）

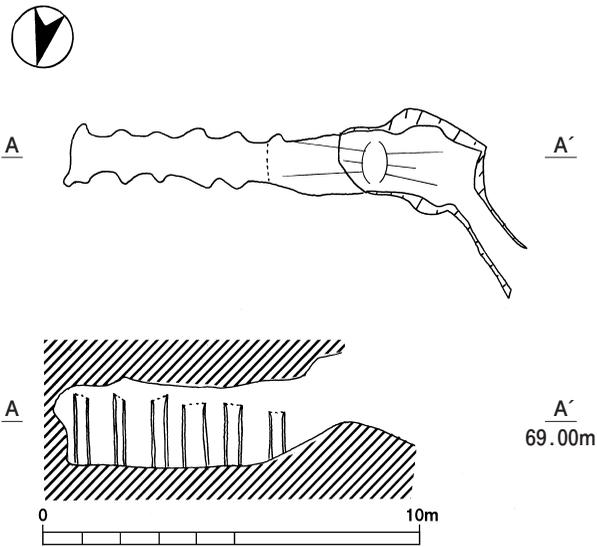


図-5 アゴケ谷陣地坑道式掩蔽部実測図（1：200）



写真-3 ポシ山陣地の坑道内に残る坑木

③ ポシ山陣地（写真13、図16、図17）

本陣地は、菅島灯台から南に約二五〇mの地点に所在しており、東向きの斜面に立地する。その一帯には、坑道式掩体一基、交通壕一基、掩体四基、がある。坑道式掩体は、全長約一六m四〇cm、幅約二m、高さ約一m九〇cmである。入口の平面プランは、屈曲した構造で爆風対策と考えられる。坑道の南側の壁面には坑木用の掘り込みが見られ、開口部から八mから一mの位置には坑木が多く残存している。坑道は約一一m二〇cmの地点から北東方面に屈折しており、約五m二〇cm続く坑道は急こう配の上り坂になっている。この坑道式掩体から南へ約六〇mの所には直径約二m、深さ約八〇cmの円形土坑があり、その西側に全長約一五mの交通壕が続いている。また、周辺には同様の規模の掩体が四基構築されている。これらの遺構はいずれも正面のおんま浜を睨むように構築されている。

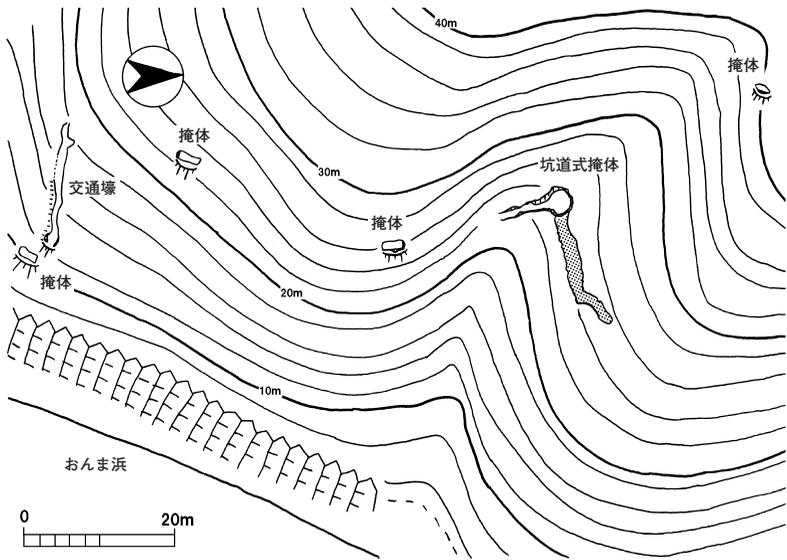


図-6 ボシ山陣地遺構群（1：1000）

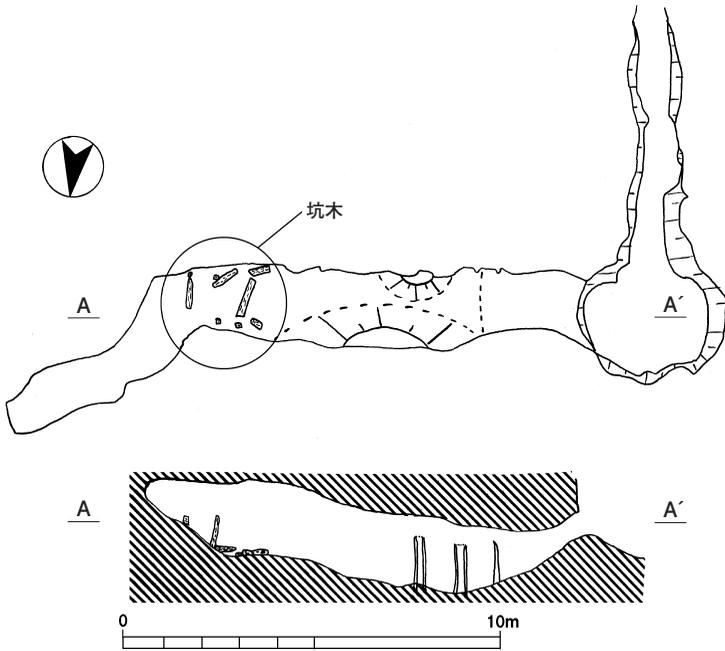


図-7 ボシ山陣地坑道式掩体実測図（1：200）



写真-4 長崎陣地の坑道内に残る鋸

④長崎陣地(写真14、図18、図19)

本陣地は、弁天神社から東に約八八mの地点に所在しており、丘陵の北向き斜面に立地する。坑道式掩体に棲息遮蔽部が付属した遺構を一基確認できた。規模は全長約四五mで入り口は二か所存在している。AからA'は棲息壕部で全長約二二m、高さは約二mある。開口部から約八mまでの幅は約一m五〇cmであるがそれ以降は約二m五〇cmと大きくなっている。両側の壁面には坑木の掘り込みがあり、床面にも同様に坑木の掘り込みがある。BからB'は棲息壕と銃室をむすぶ通路で全長約一〇m、幅約一m五〇cm、高さ約二mである。東側の壁面には掘削途中の痕跡がある。これは、銃座と棲息壕部を直接つなげる予定であったが、そうした場合、銃室が攻撃された際に棲息壕部へ直接爆風が抜けてくるため途中で掘削をやめて銃室と棲息壕部を直接結ぶのを避けるような構造にした可能性が高い。また、通路内には鋸があり、これは坑木をつなぎ合わせる際に用いられたものであると考えられる。CからC'は銃室への入り口と思われる開口部があり、全長約八m、幅約一m五〇cm、高さ約二mある。北側の壁面には、幅約七〇cm、奥行約五〇cmと幅約三〇cm、奥行約三〇cmの二つのくぼみがあり灯り置きに利用された可能性が考えられる。DからD'は全長約六m、幅約一m五〇cm、高さ約二mである。途中幅が一段広がり約二m三〇cmになっているのは銃室と思われる箇所で、機関銃などの火器を設置する予定であったと見られる。銃眼はおんま浜側へ向いているため、おんま浜に上陸した敵を狙うように本陣地は構築されたと考えられる。

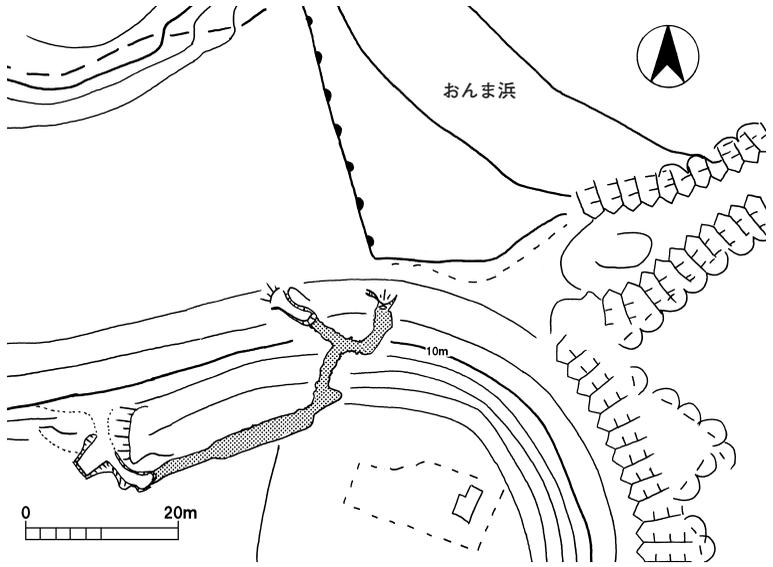


図-8 長崎陣地遺構（1：1000）

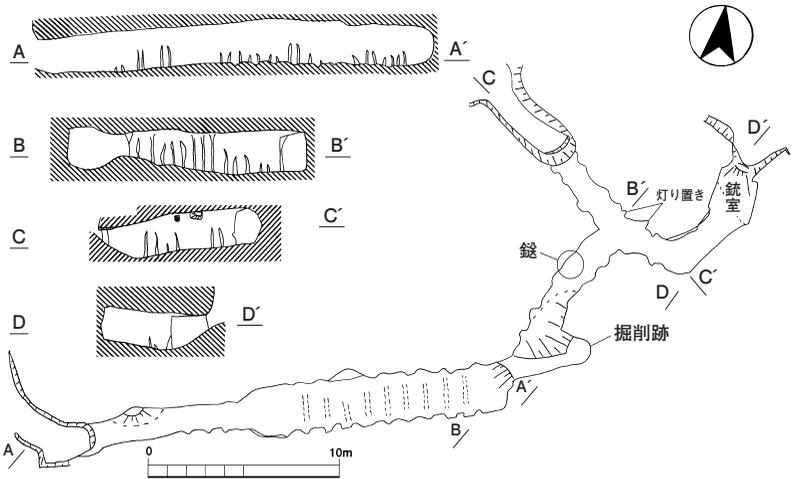


図-9 長崎陣地坑道式掩体付属棲息壕実測図（1：400）

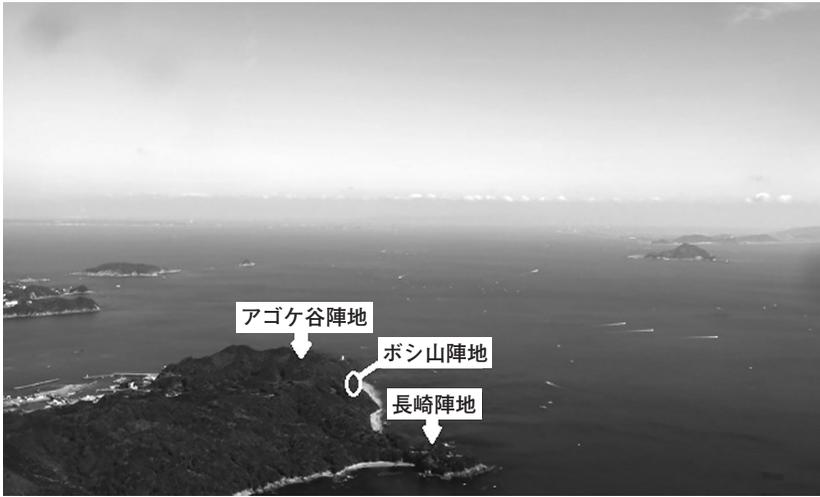


写真-5 上空から見た菅島の各陣地

(3) 各陣地位置づけ(写真-5、図-10)

第十三方面軍は敵が東海地区に侵攻した場合はその戦略目標を名古屋と想定しており、そのためには伊勢湾口の防衛の強化が必須であると考えていた⁹⁾。それゆえ伊勢湾口に位置する菅島に陣地が構築されるのは自然な流れといえよう。先述した通り菅島の陣地は四つあり、何れも東部に集中している。各陣地の役割はアゴケ谷陣地を除いては水際での敵の撃滅であろう。ボシ山陣地と長崎陣地はおんま浜に上陸した敵を攻撃すること、白浜陣地は白浜(しろんご浜)に上陸した敵を攻撃するためであることがわかる。また、構築状況が白浜陣地よりボシ山陣地や長崎陣地のほうが進んでいるのは、おんま浜の防禦が最優先であったからだといえる。これは地理的におんま浜が敵の進行方向に面しており一番上陸されやすい地点にあるからだと考えられる。しかし、敵が白浜(しろんご浜)からも上陸してきた際、ボシ山陣地や長崎陣地は裏を突かれてしまう。それゆえ、おんま浜より優先度は低い白浜陣地を構築したと考えられる。なお、アゴケ谷陣地はどのような目的で構築されたのかは不明である。いずれにせよ、海岸部に集中して堅固な陣地を構築していることから水際で敵の攻撃を行う予定であったことがわかる。



図-10 菅島の陣地群 ※矢印は射撃方向を示す。

おわりに

以上、菅島に構築された各陣地の概要と位置づけについて述べてきた。今回、陣地の構成が明らかになったことにより菅島でも本土決戦準備が行われていたことがわかった。各陣地の保存状態は良好で、中でも長崎陣地の坑道式掩体に棲息遮蔽部が付属した遺構に関しては三重県の中でもかなり規模の大きいものである。また菅島西部にも陣地が構築された証言¹⁰⁾もあるが西部は碎石場のため破壊された可能性は否めない。なお、鳥羽市内には本稿で述べた菅島の戦争遺跡以外にも神島、答志島、相差市でも報告されている¹¹⁾。しかしながら、鳥羽市内には本土決戦に備えて歩兵第四四三連隊が配備されているため、様々な場所で陣地を構築している可能性が高い。それゆえ、今後の調査次第では更に多くの遺構が見つかる可能性がある。これをきっかけに菅島を中心として鳥羽市内の更なる本格的調査を望む。

註

- (1) 十菱駿武・菊池実 編『しらべる戦争遺跡の事典』(柏書房、二〇〇二年) 一四頁
- (2) 山本達也「三重県の軍事遺跡1―志摩市市磯部町の陣地群

について」『軍装操典第95号』(全日本軍装研究会、二〇〇九年)、山本達也「三重県の軍事遺跡2 明野飛行場関連の現存遺構について」『軍装操典第98号』(全日本軍装研究会、二〇〇九年)、山本達也「三重県の軍事遺跡5 尾鷲市中村山地下壕」『軍装操典第116号』(全日本軍装研究会、二〇一四年)、山本達也「三重県の軍事遺跡(6)―潜水母艦『駒橋』の御紋章と関連遺跡」『軍装研究会第118号』(全日本軍装研究会、二〇一四年)

(3) 三重県歴史教育者協議会編『三重県の戦争遺跡「増補改訂版」』(つむぎ出版、二〇〇六年) 一七三頁、一七四頁

(4) 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 本土決戦準備1 關東の防衛』(朝雲新聞社、一九七一年) 四九七頁、四九八頁

(5) 註(3) 一七六頁

(6) 『大東亜戦争東海軍陣地編成図』防衛研究所所蔵

(7) 註(3) 一七九頁、一八〇頁

(8) 伊藤厚史「愛知県東部における本土決戦準備(1)―防禦陣地の立地と構造―」『三河考古第10号』(三河考古学談話会、一九九七年)

(9) 註(4) 五六〇頁、五六二頁、五六二頁

(10) 山本達也氏のご指示による。

(11) 註(3)

(12) 註(4)付図第十三方面軍配備図

参考文献

昭和十九年四月二十六日陸軍省陸軍省陸軍省『野戦築城教範 總規及
第一部』軍隊教育用圖書株式會社一九四五年

付記

本稿執筆にあたり、山本達也氏には調査方法や貴重史料の提供等多くの御教示を頂きました。記して御礼申し上げます。

本稿に掲載した地図は三重県共有デジタル地図一万分の一地形図、二千五百分の一地形図を使用しました。また、写真は著者が撮影したものです。

(おぎの こうた・皇學館大学文学部国史学科四年)